2018年7月22日

福音書からのメッセージ

イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。

（マルコによる福音書6章41節）

イエス様と弟子たちは休息するために、舟で人里離れた所に移動します。しかし彼らよりも先に、群衆はイエス様の元にたどり着きます。彼らはなぜ、そこまでイエス様を追い求めていったのでしょうか。着の身着のままで何も持たずに、ただイエス様にすがろうとした群衆の思いは、イエス様に伝わりました。イエス様は彼らを見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れんだのです。

羊に飼い主がいなかったら、青草が茂り、水が飲める場所に行くことができません。みんな勝手気ままに歩いていくことでしょう。敵が襲ってきても、誰も助けてくれずにブルブル震えるだけです。イエス様の目には、群衆はそのように映りました。

「憐んだ」というと、かわいそうにとか、上の方から同情してあげるというイメージがあるかもしれません。しかし聖書の原語の意味は、内臓がよじれるように痛むということです。泣いている人がいたら、自分のことのように内側からキューっとなる、そういう感覚です。苦しんでいる人がいたらその苦しみを、隣に痛がっている人がいたらその痛みを、自分のものとして背負っていくのです。5000人の悲しみを、涙を、苦しみを、痛みを、すべて自分のものとしてしょい込み、はらわたがちぎれんばかりに、その一人ひとりの気持ちを汲み取る。それがイエス様なのです。

そしてイエス様は、群衆に教えを語りました。彼らの必要を満たすためには、まずみ言葉が必要だったのです。しかし時が経ち、弟子たちは心配になります。このまま日が暮れてしまったらどうしよう。みんながお腹空かせているに違いない。でもお金はないし、あるのは5つのパンと2匹の魚だけ。弟子たちは「人々を解散させてください」とイエス様に願います。しかしイエス様は、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と突き放すように言われました。

イエス様は弟子たちに、パンと魚を人々に配るように命じます。イエス様ご自身が配られたのではありません。弟子たちの手を通じて、群衆の手にパンが行き渡りました。イエス様が「これを渡して来い」と委ねられたパンは、配っても、配っても、尽きることはありませんでした。何も持っていなかったはずなのに、渡しても、渡しても、いつまでもなくなることはありませんでした。その奇跡の中に、弟子たちはいつの間にか巻き込まれていたのです。

わたしたちは礼拝の中で、み言葉に聞き、パンによって生かされています。しかしイエス様の願いは、自分がそれを頂いて満足することだけではありません。そのパンを今、必要としている人に配ることが大切なのです。「あなたが彼らに与えなさい」、その言葉を心に留め、いつまでもなくならない「パン」を、周りの人と分かち合いたいと思います。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/